博 士 論 文 審 査 要 旨

論文審査担当者

主査　明星大学　教授　竹内　康二

委員　明星大学　教授　林　幹也

委員　明星大学　准教授　丹野　貴行

委員　早稲田大学　准教授　大月　友

申請者氏名　古谷　大樹

論 文 題 目

大学生を対象としたImplicit Relational Assessment Procedureによる関係フレーム理論の枠組みからみた潜在的自尊感情の検証

（論文審査の結果の内容）

研究構成

本研究論文は総論と実験的研究の二部により構成されている。総論では本研究のテーマ（ISE：潜在的自尊感情）に直接関連する領域の研究小史をまとめ、関係フレーム理論（RFT）を理論的枠組みとしたIRAP（Implicit Relational Assessment Procedure）による測定の必要性を指摘している。実験的研究では著者自身によって計画された研究をもとに、研究１～４までを詳細にまとめている。

研究1では、 Vahey et al. (2009) の刺激セットを参考に日本人大学生のISEをIRAPで測定し、先行研究の結果と同様の傾向が再現されることを示した。

研究2では、研究1と異なりStewart et al.(2017) の刺激セットを参考に、日本人大学生のISEをIRAPで測定し、先行研究の結果と同様の傾向が再現されるかを検証した。他にも、研究2では、ISEのネガティブ事象に対する緩衝機能が、ネガティブ事象からの心理的回復力を指すレジリエンスのように機能するのか、そして機能する場合、どの刺激の組み合わせに関連しているのかを検証した。研究2で用いるレジリエンスの尺度((田中・兒玉田中・兒玉, 2010)は、自己受容、他者信頼感、自己能力信頼感、楽観的思考の4つの因子で構成されており、これらの因子と4つの組み合わせごとの DIRAP 得点について相関係数を算出した。結果、「自分―肯定語」が等位の関係性で強く示されていた。そのため、日本人大学生においても、 Stewart et al. (2017)と同様の傾向が再現された。次に、レジリエンスとIRAPで測定したISEの関連性については、楽観的思考と「自分―肯定語」のみに、有意な正の相関が示された。このことから、「自分―肯定

語」の組み合わせに対して、「はい」と素早く選択できる者ほど、物事を楽観的に捉える傾向が示された。

研究3では、IRAP以外の尺度で検証が行われたISEの緩衝機能の実験（Greenwald & Farnham、 2000）の尺度をIRAPに変更して実施した。Greenwald et al.（2000）では、実験参加者を解決可能課題群と解決不可能課題群のどちらかに無作為に振り分け、課題後の評価と2 種類の自尊感情(ISEとESE）の関連性を検証した。Greenwaldet al.（2000)の手続きを参考にしつつ ISEの尺度をIRAPに、従属変数を課題の続行回数に変更し実施した。結果、解決不可能課題群において、「自分―肯定語」の関係性が等位で強い者ほど、課題を続ける傾向が示された。また、解決可能課題群との交互作用は示されなかったものの、「自分―否定語」の関係性が相違で強い者ほど、課題を続ける傾向が示された。

研究4では、研究3で得られた知見を参考に、困難さを与える課題の達成が「自分―肯定語」及び「自分―否定語」の関係づけの強さに影響を与えるか検証した。高難易度と低難易度の課題を用意し、実験参加者をそれぞれの課題に振り分けた。そして、課題の前後にIRAPでISEを測定した。研究4の結果、高難易度の課題を実施した群の、課題後の「自分―肯定語」の得点が高く示された。一方で、有意傾向ではあるものの、「自分―否定語」が等位の関係性で示された。この結果から、高難易度の課題を実施することで、自己肯定感が高まるものの、自己否定感も高まる可能性を示唆した。

4つの研究で得られた知見を総括すると、日本人大学生を対象にIRAPでISE を測定した場合においても、先行研究と同様の傾向を示すこと、自分＝肯定語の関係づけが強い者ほど、物事を楽観的に捉え、ネガティブなフィードバックを与える課題を長く続けること、そして高難易度の課題を実施すると自分＝肯定語の関係性が強まることが明らかとなった。また、自分≠否定語の者も、ネガティブなフィードバックを与える課題を続ける傾向が示されたが、高難易度の課題を達成後に自分＝否定語の関係づけを促進する可能性も示された。

評価できる点

本研究は、潜在的自尊感情を測定する方法としてのImplicit Relational Assessment Procedureの可能性を探索するための実験的検討を行った。このテーマを検討することには行動科学的および社会科学的にも学術的意義が認められる。また、総論部ではこのテーマに関する国内外の先行研究について十分な調査や情報収集が行われ、かつその整理と分析が十分に行われ、適切な研究課題が設定されていた。

設定された研究課題を検討するための研究の方法は慎重に計画された上で適切に実施されており、得られたデータの取り扱いや統計などによる分析結果の解釈は正確かつ緻密に行われていた。また、データの分析から結果の解釈、そして考察に至る論理展開には整合性・一貫性があり、結論が明確に導き出されていた。

本研究の価値や独自性は、RFTの観点における自己評価では自己肯定への肯定

と自己否定への否定は異なるということを本研究の結果から示唆し、これらを個別に検討した点にある。また、潜在的尺度としては代表的な方法であるIATでは測定できなかった詳細な分析を可能にしている。本研究が取り扱った潜在的自尊感情は、心理学のみならず教育学や福祉学の領域において大変重要なテーマであり、本研究の知見がそうした分野の発展に貢献すると思われる。

課題であった点

多くの研究はサンプルサイズが少なく統計的検定力が低い数値を示している(例えば、研究２の「自分―肯定語」のD-IRAP得点と楽観的思考との相関は、検定力が0.67であった)。本稿の研究の結果のみでは、「自分―否定語」の関係づけが強い(弱い)ことで、どのような心理的傾向を示すのかが、明らかとなっていない。自己否定を否定する人物がどのような特性を持っているのか、検討する必要がある。本稿の結果は、あくまでも大学生の集団の傾向であり、個人に適応できるかは不明瞭である。

しかし、上記のような課題について申請者は十分理解し、既にそれらを解決するための追加研究も実施中であること、そして限られた期間の中で実施した一連の研究であることを考慮すれば申請者の努力は高く評価できるため、研究の価値を損なうものではない。

よって、本研究は博士（心理学）の学位を授与するに十分価値あるものと認める。

（試験および試問の結果の要旨）

口頭試問においては、主に以下の点について論文審査担当者から質問や指摘があった。①IRAPがIATでは測定できないことを十分に測定できたかどうかは不明瞭であり、限界点を丁寧に考察する必要があった。②検証すべき仮説や命題が曖昧な部分があり、検証というよりは検討をしたというべきではないか。③IRAPという測定方法の可能性を拡充することが意義であったのか、潜在的自尊感情の研究を前進させたことが意義であったのか、研究の意義の焦点が十分に整理されていないのではないか。

こうした質問に対する申請者の回答は的確かつ丁寧なもので、論文審査担当者の質問内容や質問意図を十分に理解して本研究の課題を整理できていることが伺えた。また、今後の課題として上記の必要性について発展的に検討し、追加の実験を行っていく予定であるとの回答もあった。

以上を踏まえ、慎重に審査した結果、合格と判定した。